

特集

湘南藤沢メディアセンターの25年

日本で最初の「メディアセンター」： その成り立ちと特色

ながしま としき
長島 敏樹

(湘南藤沢メディアセンター事務長)

SFCとメディアセンターの誕生

1990年4月、慶應義塾大学の5番目のキャンパスとして湘南藤沢キャンパス（SFC）が誕生し、そこに総合政策学部、環境情報学部が開設された。

開設前におもに受験生向けとして作成されたパンフレット「慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス総合政策学部環境情報学部」¹⁾（赤表紙パンフレット）冒頭の石川慶應義塾長（当時）のあいさつには“このような時代の要請に応え、21世紀の学問の在り方を先取りしつつ、教育においては、豊かな発想でいろいろな角度から問題を捉え、解決に導く能力を持った人材を育成することが、新学部の使命であると考えております。”と書かれている。また同パンフレットには、「新キャンパスを支える5つの柱」の見出しの下に“現実を個々の学問の立場から切りとるのではなく、現実の社会的要請に応じて新しい学の創造をはかり、既存の学問領域をこえて未知の地平を切り開く……湘南藤沢キャンパス（SFC）は次の5つの考え方にもとづき、「総合政策」と「環境情報」の研究と教育を行い、実践と創造を通じて知の再編成を試みます”と書かれている。それに続けて「①人間と環境を重視します」、「②情報と情報処理能力を重視します」、「③総合的判断を重視します」、「④グローバルな視座と視野を重視します」、「⑤創造性を重視します」が5つの柱として掲げられている。

SFCは、従来の学問領域にとらわれず総合的でグローバルな視点に立ち、自ら問題を発見、解決できる人材を育てるために創設されたと言ってよいだろう。

そのようなSFCに湘南藤沢メディアセンターは、キャンパスと同じ1990年4月に誕生した。それは、

従来の大学図書館とはいくつかの点でことなる特徴をもっていた。まずはその名称である。大学図書館としての機能をもつものに「メディアセンター」という名を付けたのは、日本では初めてであった。新しい名称は新しい機能・新しいサービスの提供を意味している。1990年度版の「Keio SFC Guide」²⁾（SFCの在学生向けの授業履修やクラブ活動等を含む学生生活全般のガイド）では「メディアセンター」の見出しに「(図書館, 計算センター)」の語句が付記されており、その説明として“あらゆる形態のメディア、そしてあらゆる種類の情報を統合した情報基地であると同時にコンピュータ学習の開かれた「場」を提供する機関、それが湘南藤沢メディアセンターなのです。”そして、“‘本も情報も’区別なく”とも書かれている。また、当時の湘南藤沢メディアセンター所長である高橋潤二郎は「KULIC」25号で、“図書館、AVスタジオ、計算機センターという3つの機能が合体した新しいコンセプトにもとづく情報施設です。”“メディアセンターは、単なる情報の消費の場ではなく、生産の場でもあるところに特長があり、マルチメディア対象のハイリテラシー習得の場であることを目的としているのです。”³⁾と述べている。

つまり、湘南藤沢メディアセンターは従来の大学図書館（当時、慶應義塾大学では「情報センター」と呼んでいた）とコンピュータの管理・運用を司る部署（「計算センター」）の機能を合体させ、さらにAV（Audio Visual）資料の利用や映像・音声の編集等の機能を加えた機関としてスタートしたのである。

そして、3年後の1993年度には慶應義塾大学の他のキャンパスにも、それまで別々の事務組織であっ

た情報センターと計算センターを統合したメディアセンターがそれぞれ誕生している。ただし、SFC以外では組織は統合したが、事務室やカウンター（サービスポイント）は統合前のまま、キャンパス内の別々の場所にあった。

さらにその後、日本全国でも大学図書館が「メディア」を含む名称で誕生し、あるいは改称する例が現れ、現在では約50館が名称の一部に「メディア」を使っている。⁴⁾

一方1999年には、慶應義塾大学各キャンパスのメディアセンターから、コンピュータやネットワークを管理・運用する部門（旧、計算センター）が再び分離し、「インフォメーション・テクノロジー・センター」（ITC）となり、残りの部門はそのまま「メディアセンター」という名称を使い続けることになった。開設当初から一つの組織であった湘南藤沢メディアセンターでも同様の分離が行われ、コンピュータやネットワークのサービスを司る部署として湘南藤沢インフォメーション・テクノロジー・センターが誕生した。

建物は1年遅れて完成

SFCが開設された1990年度には、湘南藤沢メディアセンターはまだ正規の建物（M（ミュー）館）ができておらず、のちに学生食堂となるΣ館（厚生棟）地下の南側を間借りしてサービスを提供していた。狭い室内に書架を並べ、蔵書検索用の端末を設置、事務室まで同居するという状況で、学生数が学部1年生のみの約1,100人とはいえ、狭苦しい感じがしていた。

1990年度末にはM館が完成し、1991年度からはそこでのサービスを開始した。M館は地上3階（一部4階）、地下1階の南北に長い建物で、1階の中央に建物に入らずに東西に通りぬけられる通路があり、そこから建物内に入れる構造になっている。

この通路から建物の南側部分に入ると、後述するオープンエリアがある。北側に入ると開設当初は教員向けのコンピュータが設置された「リサーチエリア」とサービスカウンターがあった。現在は、湘南藤沢ITCの事務室、カウンター、サーバ室がある。同じ建物内にメディアセンターとITCがあり、サービス展開上、相互に協調しやすい体制をつくっている。

なお、2001年4月には、SFCの北側の敷地に新た

に看護医療学部が開設され、同学部校舎の2階に看護医療学図書室が誕生した。この図書室も組織としての湘南藤沢メディアセンターが管理・運営しているが、以下の記述は、おもにM館を対象としている。

メディアセンター（M館）の特徴的な施設・サービス

M館の施設としての最大の特徴は1階南側のオープンエリアであろう。開設当初、ここには紙に印刷された図書資料は無く、各種機器がずらりと並んでいた。オープンエリアはおよそ3つの部分に分けられていた。入口を入ってすぐのところはAVラウンジと呼ばれ、ビデオテープ、CD、LD等の視聴覚資料や機器が並んでいた。それに続くのがワークステーション・ラウンジで、数十台のワークステーションが並んでいた。一番奥の窓側（南側）は語学学習セクションで、外国語学習用のLL機器とワークステーションがセットで置かれていた。ここはLL教室も兼ねており、図書館機能を持つ建物内でありながら授業が行われることもあった。これらのエリアの両側（東西）にはガラス張りの部屋があり、そこにも合わせて30台ほどのワークステーションが置かれていた。ワークステーションはキャンパス・ネットワーク・システム（CNS）に接続されており、学生たちはそれらを自由に使って、キャンパス内だけでなく世界中と情報のやりとりができる環境が整えられていた。ただし、当初はまだWWW（World Wide Web）は無く、学生たちは電子メールやFTP（File Transfer Protocol）を利用していた。入口を入ってすぐの場所に様々な機器がずらりと並び、それを大勢の学生が使っている光景は壮観で、当時のキャンパス見学者からも注目されていた。なお、1996年からはノートPCの貸出サービスを開始した。

現在でも1階南側はオープンエリアと呼んでおり、数十台のPCやAV機器等が並んでいるが、エリアや機器の構成・配置はかなり変化している。LL機材は無くなり、PC1台につき、キャスター付きの椅子を2台置き、1台のPCを複数人で使えるようにしている。両側にあったガラス張りの部屋は、一つはラウンジとなり、飲み物の自動販売機を設置している。もう一つはCNSコンサルタント（後述）のサービスカウンターになっている。なお、PCやネットワークはITCが管理・運用している。

特集 湘南藤沢メディアセンターの25年

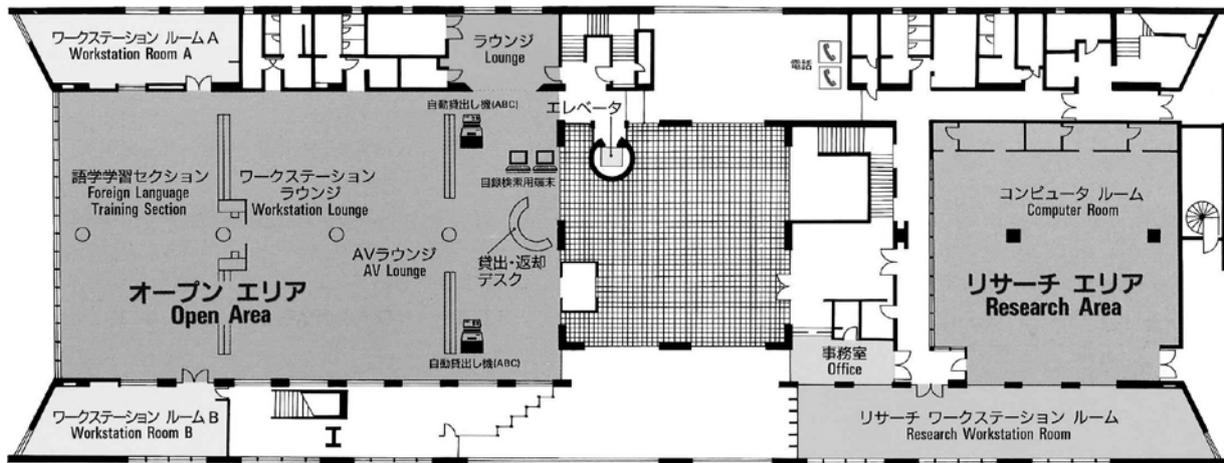


図1 開設当初の1階 (当時の利用案内冊子から抜粋)

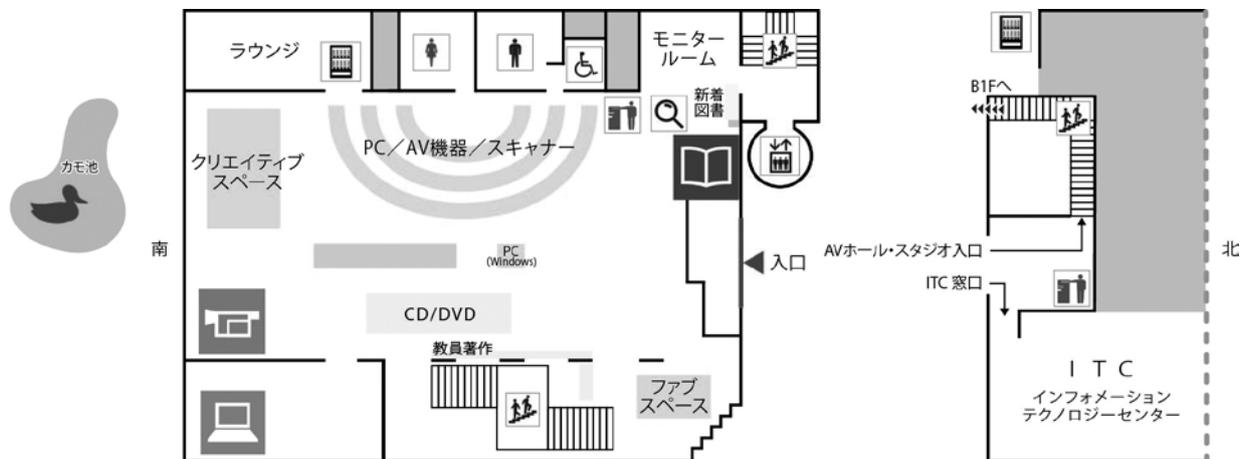


図2 2015年現在の1階 (当センターWebページのフロアマップから抜粋)

2013年4月には、オープンエリアの一角に「ファブスペース」を開設した。これは、デジタル技術を使ったものづくりができる場所で、開設当初は4台の3Dプリンタを置き、SFCの学生であれば自由に使えるようにした。大学図書館に相当する施設に3Dプリンタを設置したのは、日本では初めてである。2014年4月には、場所を移動、拡張し、設置する機器の種類や台数を増やした。2015年度に入ってから、さらに機器の種類や台数を増やし、3Dプリンタ、3Dスキャナ、デジタル刺しゅうミシン、工業用ミシン、レーザーカッター、ペーパーカッター等を設置している。詳細はファブスペースのWebページ⁵⁾を参照してほしい。ファブスペースの開設は、「メディアセンター」の名にふさわしく“あらゆる形態のメディア、そしてあらゆる種類の情報を統合した情報基地”，あるいは“メディアセンターは、単なる情報の消費の場ではなく、生産の場でも

あるところに特長があり、マルチメディア対象のハイリテラシー習得の場であること”を体現していると考えてもいいだろう。

参考に、図1にM館開設当初の1階の配置図、図2に2015年7月現在の配置図を示した。

上述の通り、オープンエリアでは授業が行われることがあったほか、友達と相談しながらパソコンを使う学生、パソコンの使い方を教えるコンサルタント(後述)の声など、どうしても騒々しくなってしまう。それが階段の吹き抜けを通して上層階にも伝わり、館内全体が騒がしくなりがちであった。そこで1998年、2階・3階の北側部分を「静かエリア」とし、このエリアでの私語を禁止した。逆に言えば、2・3階を含め南側部分では多少の私語は可としたわけである。

M館地下には開設当初から、音響スタジオ、映像スタジオ、AVホールを設置している。AVホール

を持つ大学図書館は少なくないが、スタジオを持つところは少ないのではないかと思う。スタジオで収録した音声や映像は、1階のオープンエリアにあるPCで編集できるようになっている。

キャンパスの授業でグループワークが課せられることが多いこともあり、M館内には開設当初からグループ学習室（学生たちは「グルワ室」と呼んでいる）があった。場所や部屋数など、多少の変遷はあるが、現在は2階に3室、3階に4室設けている。

2007年には2階のレファレンスデスクの横に「イベントスペース」を開設した。ここには可動式の机や椅子、収納式のスクリーンを置き、メディアセンターやITCの各種説明会、セミナー等を開催している。後述するライティング&リサーチコンサルタントの相談業務もこのスペースで行っている。

夜遅くまで開館していることも特徴の一つとして挙げてよいだろう。SFCでは当初から「24時間キャンパス」が実施されていた。学生たちの中には授業が終わってもワークステーションを使うため、あるいは研究プロジェクト活動のため、夜間残留する者が少なからずいた。メディアセンターは24時間開館こそしていないが、学生たちにとって便利にならざるを得ない方針のもと、M館完成時の1991年度には平日22時まで開館していた。その後、キャンパス発の最終バスの時刻に合わせて閉館時刻も遅くなり、1993年度からは23時閉館としている。

図書館の蔵書（資料）面での特徴は、古い資料を持たないということが挙げられる。開設当時、慶應義塾大学にはすでに4つのキャンパスがあり、それぞれに図書館（情報センター）があり、古い資料を含め相当数の蔵書があった。そこで、湘南藤沢メディアセンターでは戦後刊行されたものを基本として収集することとされた。その後、原則として1990年（キャンパス創設年）以降のものしか持たないと変更されている。また、一度蔵書となった資料も、他キャンパスに同じものがあるうえ、利用が少ないと判断できれば除籍してもよいとの方針をとっており、蔵書は新陳代謝を繰り返している。複数のキャンパスを持つ総合大学に新しくできた図書館だからこそ可能なことであろう。

貸出冊数に制限を設けていないことも特徴といえよう。当時、慶應義塾大学の他のキャンパスの図書館では、学部生は5冊まで、教職員は30冊までと

いった貸出冊数に一定の制限を設けていた。他の大学図書館でも大方は何らかの冊数制限を設けている。ところが、湘南藤沢メディアセンターでは1990年の開設当初から学部生を含め、貸出冊数を制限していない。

なお、M館内での活動ではないが、湘南藤沢メディアセンターが組織として行っている業務に、キャンパス内の各教室に設置されているAV機器の維持・管理がある。具体的には、各教室のプロジェクター、DVDプレーヤ、マイク、遠隔会議システム等の日々の点検、トラブル対応、操作補助、更新（機器入れ替え）時の仕様作成や業者との連絡調整等である。慶應義塾大学の他キャンパスを含め、おそらくほとんどの大学では、このような業務は授業を管轄する教務関係部署か施設を管轄する部署が担当しているのではないだろうか。

学生の活躍

開設時、SFCの事務組織のコンセプトは「スモール・アンド・スリム」であった。そのためどの部署も職員数は最低限で運用され、メディアセンターも例外ではなかった。その上、従来は行っていなかったコンピュータやAV機材関連の新しいサービスも行わなければならない、職員は多忙だった。そこで、学生をアルバイトとして雇い、「コンサルタント」と称して職員の業務の一部を担ってもらう制度が始まった。最初のコンサルタントは「コンピュータコンサルタント」（現在は「CNSコンサルタント」と呼び、ITCの管轄になっている）で1991年度に始まった。翌1992年度にはAV（Audio Visual）コンサルタント、さらに1993年度にはデータベースコンサルタントを導入している。彼らは、それぞれのサービスカウンターで日常的なコンピュータ、機器類、データベース等の使い方の案内、質問対応、機器の管理等のほか、利用ガイド類の作成（当初は冊子体、最近は多くがWeb版）にもたずさわっている。

知っている学生が知らない学生に教える、ピア・サポートの体制が早い時期から出来ていたと言っているだろう。

2011年度からはライティングコンサルタントの試行を開始した。これは大学院博士課程の学生やオーバードクターによる、論文やレポートの書き方など研究上の様々な悩みについてコンサルティングを行

うサービスである。2012年度からは、名称をライティング&リサーチコンサルタント（WRC）と改称し、正式にサービスをスタートした。

同じく2011年度からメディアセンターフレンズという学生グループの制度を開始した。これは特定の業務を担当するのではなく、学生の視点でメディアセンターのサービスや施設の改善、利用促進のための企画・提案・実施をしてもらうものである。これまで研究会（ゼミ）を紹介する展示、ビブリオバトル、「本の福袋」、講演会等を実施している。

アクティブ・ラーニング・スペース的なサービス

これまで述べてきたように、湘南藤沢メディアセンターは、パソコンの設置や貸出、ビデオカメラ等の貸出、グループ学習室、学生コンサルタントによる利用案内・論文作成支援等、学生の学習を支援するための様々な施設・機器・サービスを提供している。

これらを総合すると、ここ数年国内の大学図書館で盛んに導入されている「アクティブ・ラーニング・スペース」あるいは「ラーニング・commons」に近いと言ってもいいのではないかと感じている。しかし、これらが館内の一カ所ではなく、分散している。文部科学省の「学術情報基盤実態調査」で平成24（2012）年度分から「アクティブ・ラーニング・スペース」設置の有無等が調査項目に追加された。そこで、文部科学省の担当部署に当センターの状況を説明し、どのように回答するのが適当か問い合わせたところ、「アクティブ・ラーニング・スペースを設置しているとは言えない」とのことだった。当面、そのような場所を設ける予定はないので、調査には「設置する予定はない」と回答し、自由記述欄に当館で行っているサービスや施設を記入した。

これからの湘南藤沢メディアセンター

2015年、SFCとともに湘南藤沢メディアセンターは開設25周年を迎えた。ここまで述べてきたように、日本で初めての「メディアセンター」として誕生して以来、湘南藤沢メディアセンターは他の大学図書館等ではあまり見られない、先進的な取り組みをしてきたし、様々な変化（改善あるいは進歩といってもいいだろう）を続けてきた（本稿では割愛した事項もあるので末尾の略年表も合わせて参照いただきたい）。

それでもまだ、解決すべき課題は次々と生じており、今後も変化は続くだろう。たとえば、2013年4月に設置したファブスペースは機器の進歩が目覚ましく、数年以内に機器の入れ替え等があるだろう。10年ほど前に大幅に什器を入れ替えたオープンエリアも、最近では使い勝手の悪さが気になるようになってきたため、更新する必要があるだろう。その際には、アクティブ・ラーニング・スペースの設置についてもあわせて考える必要がある。資料の電子化や書庫狭隘化対策は常に頭を悩ます問題である。入館者数はここ数年、漸減傾向にあり、それへの対策も考える必要がある。また、ここ数年、学内では研究支援、あるいは研究情報の発信についての話題が多くなってきた。湘南藤沢メディアセンターではこれまでも各種データベース検索の技術を生かし、SFCの研究情報を専用のデータベースに登録する作業を進めてきたが、今後は研究者自身による研究情報の発信や整理を支援する体制を整える必要があるかもしれない。

キャンパスの教職員の口からは、よく「SFCは走り続けている」という言葉が聞かれる。SFCと同様、湘南藤沢メディアセンターも四半世紀の間、走り続けてきたし、おそらくこれからも、キャンパスやキャンパスを取り巻く環境の変化に応じて、そして時代の先取りを意識しながら走り続け、変わり続けていくだろう。

注・引用文献

- 1) 慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス総合政策学部環境情報学部：1990年4月開設。[東京]、慶應義塾、[1989]、45p.
- 2) 藤沢新学部開設準備室編集。Keio SFC guide '90。[東京]、慶應義塾大学、1990、101p.
- 3) 高橋潤二郎。湘南藤沢メディアセンター所長就任に当たって。KULIC。1991、25、p.1-2.
- 4) 日本図書館協会図書館調査事業委員会編。日本の図書館：統計と名簿、2014。東京、日本図書館協会、2015、511p.
- 5) “ファブスペース”。慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンター。http://www.sfc.lib.keio.ac.jp/general/fabspace.html、(参照2015-07-22)。

参考文献

- 1) 孫福弘ほか編著。未来を創る大学：慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）挑戦の軌跡。東京、慶應義塾大学出版会、2004、479 p.

湘南藤沢メディアセンター略年表

1990年度	湘南藤沢キャンパス開設（総合政策学部・環境情報学部）
	湘南藤沢メディアセンター組織が発足し、Σ館にてサービス開始
	CNS（キャンパスネットワークシステム）運用開始
1991年度	湘南藤沢メディアセンター図書館システムFAINS（Fujisawa Academic Information Network System）稼働
	竣工したメディアセンター棟（M館）へ移転、開館時間を1時間延長し、平日は22時まで
	コンピュータコンサルタント制度を導入
1992年度	藤沢市民図書館との相互協力開始
1992年度	AVコンサルタント制度を導入
1993年度	KOSMOS（慶應義塾大学図書館システム）稼働開始に伴い、FAINS稼働終了
	データベースコンサルタント制度を導入
1994年度	資料の貸出・返却サービスを2階レファレンスカウンターから1階受付カウンターに移動
1996年度	ノートPCの貸出サービス開始
	デジタルビデオカメラの貸出を開始
1997年度	CD-ROM検索コーナーをネットワーク化
1998年度	「静かエリア」を設定
1999年度	コンピュータやネットワークの管理部門がインフォメーションテクノロジーセンター（ITC）として、メディアセンターより分離
	マルチメディア・マルチリングル・スペース（MMLS）を3階に開設
2000年度	キャレルームを新設
2001年度	看護医療学部開設、看護医療学部校舎2階に看護医療学図書室を開設
	モーションキャプチャーシステム導入
2002年度	P（Pleasure）Book コレクション設置
	書庫狭隘化対策として2階南のレファレンスブック等の書架を交換・増設
	CDP資料室（就職資料室）をグループ学習室に変更
2003年度	マルチメディア・オンライン・データベースe-KAMO（Keio Archives in Multimedia Online）System公開
	マルチメディア・マルチリングル・スペース（MMLS）を2階に移設
2004年度	「湘南藤沢メディアセンター飲食ルール」運用開始
	看護医療学図書室の授業期間中の平日の開館時間を21時まで1時間延長
2005年度	オープンエリア改修
2006年度	貸出機材にハイビジョン対応ビデオカメラを導入し、撮影から編集、製作、視聴までの流れのハイビジョン対応を実現
	神奈川県内大学図書館相互協力協議会会長館に就任（平成18・19年度）
2007年度	2階レファレンスデスク周辺の改修工事（イベントスペースの新設、閲覧席の刷新など）
2009年度	館内サインを一新（各ルーム、レファレンスデスク周辺）
2010年度	ツイッター開始
	入館ゲートを一新し、ICカード対応を実現
	ぼれぼれ文庫設置（看護医療学図書室）
2011年度	facebook開始
	ライティングコンサルタントの試行
	メディアセンターフレンズ制度を開始
2012年度	ライティング&リサーチコンサルタント（ライティングコンサルタントの名称変更）を本格稼働
	M館1階にラウンジを新設
2013年度	春学期の授業「資料検索法」をメディアセンター職員2名が講師（非常勤）として担当
	M館1階オープンエリアに「ファブスペース」を設け、国内の大学図書館で初めて3Dプリンタ4台を設置
	M館1階ラウンジに“慶應の水”を含む飲物（ペットボトル）の自動販売機を設置
2014年度	ファブスペースを移設・拡張、新型3Dプリンタ、3Dスキャナ、デジタル刺しゅうミシン、カッティングマシンを導入
	グループ学習室を改修し、個室化
2015年度	ファブスペースをさらに拡張、新型3Dプリンタ、ハンディ3Dスキャナ、職業用ミシン、レーザーカッターを導入